

福澤研究センター講座 2018年度 『時事新報を読む』—福澤イズムの深層に迫る— (全5回)

時事新報は福澤諭吉が創刊した日刊新聞で、戦前の東京では「五大新聞」の一つに数えられるほどの有力紙でした。その中の記事は、福澤が直接執筆したと否にかかわらず、「不偏不党」・「独立不羈」の立場をとり、様々な分野にわたって、ともかくも「福澤イズム」が濃厚に表れています。

本講座では、各方面で活躍する5人の演者がそれぞれの専門分野の立場からその紙面を分析することを通して、福澤の思想の深層に迫ります。

- ◇会場：慶應大阪シティキャンパス
- ◇開催時間：14:00～16:00 (開場 13:00)
- ◇事前申込制 (各回毎の個別お申込可能、当日参加可能)

▲▽▲ 各講演の趣旨とねらい (第3～5回) ▲▽▲

■第3回 2019/ 1/26(土) 曾野 洋 四天王寺大学 人文社会学部教授 『時事新報と災害復興支援 — そのとき福澤諭吉は！？ —』

福澤諭吉が生きた江戸末期から明治期も今と同様で、日本列島は大きな自然災害に直面した。明治以降の罹災者のためにそのつど福澤は、自ら創業経営した『時事新報』を活用して莫大な義捐金を集める。福澤による罹災者支援の特質は何か。躊躇なく困っている人々を助けようとした彼の強い思いの背景にあるものは何か。こうした点を考察することにより、地震や台風被害などに苦しむ現代人にとっても示唆に富む「福澤イズム」の一端に接近したい。

■第4回 2019/ 2/16(土) 柏原 宏紀 関西大学 経済学部准教授 『草創期時事新報の「政治家」論 — 明治初期の「政治家」について考える —』

現代の日本では、政治家をめぐる問題がしばしばメディアで取り上げられ、政治家批判が展開されることも多いが、明治前期の日本では「政治家」にどのようなことが求められていたのか。そもそもまだ帝国議会も内閣制度も創設されていない時代に、どのような人々を「政治家」と考えていたのか。草創期の『時事新報』の社説などを材料に、福澤諭吉とその周辺の「政治家」論を視野に入れつつ検討してみたい。

■第5回 2019/ 3/16(土) 都倉 武之 福澤研究センター准教授 『福澤諭吉にとっての新聞 — 時事新報社説執筆者論争や「脱亜論」批判への視座 —』

福澤諭吉といえば『学問のすゝめ』や『文明論之概略』などと並んで、近年では「脱亜論」のイメージが広がっています。「脱亜論」は福澤が経営していた新聞『時事新報』の社説として掲載された短文で、特に福澤の思想を代表する論文でもなく、当時本に収録されて広く読まれたわけでもありません。しかし『時事新報』の存在自体がもはや人々から忘れ去られ、福澤の思想に対する一般的な理解も戦後変容してきました。本講義では福澤がどのように世界を見つめ、新聞というメディアにどのように向き合ったのかを出発点に、『時事新報』社説をめぐる近年の研究動向も概観しながら、「脱亜論」をどのように読み解くことが、福澤の当時の認識や同時代人の視座に立つこととなるかを考えてみたいと思います。